第70回山口大学医師会・山口大学医学部主催 医師教育講座（体験学習）

「日常診療で役立つ皮膚科の基礎知識」

と　き　令和２年２月２日（日）9：00～12：00
ところ　山口大学医学部 医明館１階

指導印象記

山口大学医学部附属病院皮膚科　下村　尚子

令和２年２月２日、山口大学医学部医明館において、皮膚科学講座が担当し「第70回山口大学医師会・山口大学医学部主催医師教育講座」を開催させていただきました。

皮膚科以外の先生方にとって、日常診療の中で、患者さんから「そういえばこんな皮疹が出ているけど、何だろう」とのご相談を受けることは珍しくないのではないかと思います。県内は皮膚科医が多いとは言えず、皮膚科受診を勧めても、皮膚疾患は体調不良など差し迫った状況を伴わないことが多いですから、「皮膚科を受診するほどではない」と言われることもあるのではないでしょうか。そんなときに少しでもお役に立てたらと思い、今回のテーマは「日常診療で役立つ皮膚科の基礎知識」としました。

まず当科教授の下村 裕 より、「皮膚科領域のcommon diseaseの診断と治療」ということで講義があり、湿疹、皮膚炎と蕁麻疹の違い、見逃せない疥癬や白癬、ヘルペスなどの感染症について話がありました。

皮疹の表現は難しく、例えば患者さんが「蕁麻疹が出た」と受診されても蕁麻疹ではないことはよくあります。「24時間以内に出没を繰り返す」「皮疹が移動する」「皮膚描記法で紅斑と膨疹が出現する」が蕁麻疹を診断するポイントです。以前は「診察を待っている間に皮疹が消えてしまった」「診察してもらうときに限って出ていない」と言われることもありましたが、携帯電話やスマホのカメラ機能が充実し、皮疹の写真を撮って持ってきてもらうことが簡単になりました。

続いて皮膚科と医療安全部を兼任している准教授の山口道也から、「内臓疾患に伴う皮膚病変（デルマドローム）」の講義がありました。様々な全身疾患から特定の皮膚症状をきたすデルマドロームは皮膚科医としても大変興味深いところです。糖尿病の足病変など、皮膚科でなくても多くの先生がご存知のものもありますが、皮膚科医にとってもなかなかマニアな疾患もあります。もしかしたら、私達皮膚科医よりも他科の先生の方が気づかれているものもあるかもしれません。

皮疹から全身疾患を推定し、皮疹と全身状態の改善に結びつけられたら素晴らしいと思うのですが、残念ながらそんなにうまくいくことは多くありません。むしろ体のかゆみから「こんなに体がかゆいのは、体の中に何か悪いものがあるのではないか」と受診される患者さんの方がずっと多く、そういった方全てに全身検索を行うのは保険診療上もあまり望ましくないと思われますので、原因不明のかゆみに苦慮することが多いのが現実です。皮膚科ほど「こんな皮疹やかゆ

みが出た原因は何か」と患者さんに質問される科も少ないのではないかと思います。

後半は体験学習で、「薬疹疑いの患者に遭遇した際の薬剤投与歴の作成法と被疑薬の推定トレーニング」を私が担当させていただきました。前半の講義では薬疹についてご説明する時間が取れなかったため、まず薬疹の病型やそれぞれの薬疹を起こしやすい薬剤と、薬剤開始からの好発時期などについて説明させていただきました。多数の病型の中で、スティーブンス・ジョンソン症候群（SJS）型、中毒性表皮壊死症（TEN）型、薬剤過敏性症候群（DIHS）型、急性汎発性発疹性膿疱症（AGEP）型などは直ちにステロイド全身投与が必要になりますので、速やかに総合病院の皮膚科にご紹介いただければ幸いです。

薬疹を疑って皮膚科に紹介されることは特に総合病院に勤務していれば毎日のようにありますし、薬疹を絶対に起こさない薬剤はないと思いますので、「これは薬のせいだろう」と受診される患者さんもたくさんおられます。多数の薬を内服されている患者さんの薬歴をまとめるのは手間のかかる作業です。皮膚科で処方する薬の他に、他科の薬剤についてもある程度頭に入れておく必要がある上、年々新薬が増え、またジェネリック医薬品の普及により、なじみのある商品名が不慣れな一般名表示に変わったこともあり、お薬手帳を持参していただいても時間がかかります。薬疹の可能性があって皮膚科紹介される際には、ご処方いただいている薬だけでも、おおよそいつから処方されているかをご教示いただけますと皮膚科医としては大変助かります。

体験学習ではご参加の先生方に図を用いた薬歴作成に取り組んでいただき、また積極的にご質問もいただき、こちらとしても勉強になりました。ご参加いただいた先生方、県医師会の関係者の皆様、ありがとうございました。

受講印象記

山口市医師会　田村　博子

久しぶりに体験学習に参加しました。今回は「日常診療で役立つ皮膚科の基礎知識」ということで、皮膚トラブルに出くわすたびにうろたえる私としては是非受けてみたいと思ったのです。

当日の朝、会場に着いたところで、山下哲男先生がにこやかに近づいてこられました。何となく嫌な予感。「受講印象記を書いてもらえますか？」…予感的中でした。

講義１は下村 裕 教授による「皮膚科領域のcommon disease の診断と治療」。

下村教授のご講義は山口大学皮膚科教授に就任された年の県医師会生涯研修セミナーでお聴きしたことがあります。ご専門の毛髪のお話で、日頃聴く機会のない分野のお話が興味深かった記憶があります。

さて、冒頭、教授が皮膚は全身で一番大きな臓器であり、目に触れるため、どの診療科の医師も皮膚疾患の診療を行う機会が必ずあります、とお話しされ、全体で 10kg もあるという皮膚を「臓器」として再認識しました。

Common disease として取り上げられたのは蕁麻疹、かぶれ・虫刺され、熱傷、水疱性類天疱瘡、ウイルス感染症、細菌感染症、真菌感染症と本当に日常よく遭遇する皮膚疾患でした。お話は分かりやすく実践的で私にもすぐ活用できそうでした。DPP-4 阻害薬によって水疱性類天疱瘡が誘発されうることなど、近年注目されている知識も得ました。

講義２は山口道也 先生による「内臓疾患に伴う皮膚病変（デルマドローム）」。

山口先生は医療の質・安全管理部の准教授もされています。講義に入る前に　准教授がひとつのグラフを示されました。そのグラフから導き出されるのは「明日になれば 74％は忘れる」!? 確かに内臓病変の存在を示す皮膚の症候、デルマドロームはとても多く、すぐに私の許容量をオーバーしてしまいました。そのため、皮膚科医は患者さんの全身疾患を見つける門番となり、また全身疾患に伴う皮膚症状を治療する最後の砦となります、とおっしゃったのが、とても心強く感じられました。

最後は体験学習で「薬疹疑いの患者に遭遇した際の薬剤投与歴の作成法と被疑薬の推定法のトレーニング」でした。最初に薬疹の概念、主な臨床型、臨床病型と好発薬剤、重症薬疹のいくつ

かをスライドで示された後、投薬期間から原因薬剤を推察する、ということで実際に５症例について薬歴を作成してみました。単純な作業のようですが、きちんと整理して書き出すことによって原因薬剤が推測しやすくなるのを実感しました。

日頃、皮膚疾患で悩むのは私だけではないらしく、参加の先生方からたくさん質問がありました。私も訪問看護師さんから在宅や施設の患者さんの画像を添えて相談されることがあったり、私が写メを撮って皮膚科の先生に相談し、梅毒が判ったときもありました。教授の講義からは皮膚科に紹介する前の次の一手を教えていただけたように思いますし、一方、山口准教授からは悩んだ時には紹介していいんだと気持ちを軽くしていただいたように思います。体験学習は…実際にしてみます！

休日を返上して、20名足らずの参加者のために、丁寧な講義やトレーニングをしてくださった皮膚科学講座の先生方、ありがとうございました。山口准教授が「ONE　TEAM」で患者さんの診療にあたるために病診連携および診診連携は必要不可欠です！とおっしゃいましたが、近隣の皮膚科の先生方を含めて、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

「山口県の先端医療についての紹介」原稿募集

投稿規程

字数：１頁1,500字、6,000字 以内

1）タイトルをお付けください。
2）他誌に未発表のものに限ります。
3）同一会員の掲載は、原則、年３回以内とさせていただきます。
4）編集方針によって誤字、脱字の訂正や句読点の挿入等を行う場合があります。また、送り仮名、数字等に手を加えさせていただくことがありますので、ある意図をもって書かれている場合は、その旨を添え書きください。
5）ペンネームでの投稿は不可とさせていただきます。
6）送付方法は電子メール又はCD-R、USBメモリ等による郵送（プリントアウトした原稿も添えてください）でお願いします。
7）原稿の採用につきましては、提出された月の翌月に開催する広報委員会で検討させていただきますが、内容によっては、掲載できない場合があります。

【原稿提出先】
山口県医師会事務局総務課内　会報編集係
〒753-0814　山口市吉敷下東3-1-1　山口県総合保健会館５階
TEL：083-922-2510　FAX：083-922-2527　E-mail：kaihou@yamaguchi.med.or.jp